【質疑応答】

○**丸山**　どうもありがとうございました。

それでは残り 30 分ほどになりますが、まず、本日ご登壇の先生方から、今の 3 先生のコメントに対してのお考えをちょっと述べていただきつつ、会場の方、皆様にご意見、質疑応答などをいただけたらと思います。じゃあどなたから。田丸先生から、お願いいたします。

○**田丸**　今、西原先生、小澤先生、長尾先生のコメントを伺っていて、やはり私が言い足りなかったところなんですが、評価したら、それをどう活用して、それがもちろん自分たちのためだけでなく、外に出すということが必要だと思うのですが。特に長尾先生がおっしゃっている点で、私はいつも大学の国際化と、もう十年以上、でもそれって何が国際化なのか。じゃあ国際化していますという評価に到達するためには、何があったら国際化なのかというところが、非常にわからないんですね。それが 1 つ。

それから立教大学が何か最初、何でしたっけ、何とかグローバル、スーパーグローバル大学というので、何なんだろうこれと思ったんですけれども、いずれにしても、スーパーグローバルでもトップグローバルでもいいんですけれども、それに選ばれて喜んでいるんじゃなくて、選ばれてしまったら過酷な評価が待っているというふうになるといいなと思うんですね。過酷な評価って、まだ今の段階ではありそうもない。何か、あるんだろうけれども、それが理にかなった評価なのか。だからそちらもできるといいなという思いがあるので、そういう意味では、長尾先生がおっしゃった、2 番目と 3 番目ですか、そこのところはとても大切だと思います。

それから私の発表の中でちょっと触れたのですが、日本語プログラムというのは大学の中にあるわけですから、大学の目的が決まらなければ、日本語プログラムの学生の能力がこれだけ上がったとか、それから漢字が幾つわかるようになったというのでは、それは評価としては、余りに悲しい。ですから、大学がしっかりした目標をつくらないなら、日本語プログラムの方が大学にもっとしっかりしてくださいよと言うぐらいでなければいけないと思っています。すみません、何

かとりとめがなくて。

○**池田**　では続いてですが、田丸先生もおっしゃってくださったように、3人の先生方のコメントをお聞きして、やはり私が一番感じたのは、大学と共通のゴールを持つということがとても大切だということです。大学と共通のゴールを持っていないと、例えば大学の国際化の流れの中で、日本語教育センターを組み込んだ評価をしていくというときにも、西原先生がおっしゃったような、不本意な評価になってしまいがちだろうと思います。なので、まずは大学としっかり、立教大学がどこを目指して国際化をしていくのかというところを、きちんと共有させていただくというところから始めるということの重要性を感じました。

それから日本語教育センター長が副機構長に入っているということですので、やはり立教大学が国際化のゴールを設定するといったときに、間違うことは多々あるので、そういうときには、やっぱり、ちょっとそれは違う方向なんじゃないですかということを機構の中できちんと発言をしていき、機構長にはそれにきちんと正面から耳を傾けていただいて、お互いに信頼関係を持って話し合いながら、立教の国際化というのが進んでいけばいいなというふうに思いました。

それから広報についても、どう広報していくことが一番効果的なのかというのは、戦略的ではありますが、正直、あんまりずるいことはしちゃいけないと思うんですけど、ぎりぎりのところで、どう見せていくかというのは重要だと思うので、そこについてももう少し考えていきたいと思いました。

○**山口**　3人の先生からコメントを頂いて、今、立教大学が抱えている問題、それをズバリ指摘していただいたのかなというふうに思っています。特に日本の大学はと言ったほうがいいのかもしれませんけども、これまで果たしてきた役割と、今後果たすべき役割というので、どんどん、どんどん、変わっていっていて、その中で、きちんとした形での評価ということが、より一層求められていて、今は立教大学もさまざまな意味での情報公開ということは、なるべく包み隠すことなく出すということをまず基本としてやっていて、特に長尾先生からご指摘いただいた立教評価モデルというのをきちんと構築するということで言うと、大学の中にIRの組織をつくって、さまざまな意味での指標で、当然、外部評価というのも大切なんですけども、その前に、きちんと我々がどういうことを教育目標として、大学の国際化の目標を立てて、研究ついても、そこに対して、現在どの程度の達成度になっているかということをきちんと出すということは心がけています。

今回ご指摘いただいた中で言うと、その部分のところということを、もう少し外に対してきちんとアピールするということが、より求められているのかなというふうなことを感じました。

あと西原先生のほうからご指摘いただいた広報戦略であるとか、特に出口ということについて言うと、卒業というか、日本語も含めてさまざまなプログラムがあった中の、それを修了した人たちが、きちんと社会の中で定着するというよりは、社会の中でどういう貢献をしているかということについてもきちんと意識を持って、そこに大学がちゃんと送り出せている。そこでいろいろな貢献ができているということも含めて叶えていかなきゃいけないなというふうに特に思っています。今、日本社会が、これまでの人口増から減少に変わっていく中で、日本の大学はどう生き残るか。今、日本に 800 近くの大学がある中で、淘汰の時代ということが間違いなく来る。そのときに、立教大学が世界に対してきちんとした貢献ができていないということであれば、それはもう閉じざるを得ない大学だというふうに思います。ですからその部分をきちんと評価してもらえるように、自分たちとしても、自己評価をきちんとし、そのためにも、きちんとした将来に対しての政策ビジョンというのをはっきり出すということが多分大切なんじゃないかと思います。

それできょう実は、講演の中で触れられなかったのですけれども、若手の教員、職員、一緒になって、今年度ビジョン、池田先生も中心になって……。笑うことはないと思うんですけど、出して、今までにない取り組みで、特に 10 年後のことを考えるときに、私はまだ 50 代なので、10 年後はまだ仕事しているはず、悪いことしなければ仕事しているはずなんですけども、若い人たちも一緒になって、10 年後を考えるということを実はやっていて、それがあった中で、そこに対してのきちんとベクトルの向きが合っているかどうか、どこまで到達できているか評価するということをちゃんとやっていかないといけないのかなと。

そういう意味で、長尾先生にご指摘いただいた、立教評価モデルということは肝に銘じ、今後、早急に交渉していけるようにということを取り組んでいきたいと強く思いました。ちょっと長くなりました。申しわけありません。

○**丸山**　ありがとうございました。

それではフロアの方々から、ぜひ率直なご意見、質問などを頂戴できればと思います。きょうは学生もいるし、それから日本語教育センターの前の運営委員の

先生もいらっしゃる、他部局の先生もいらっしゃるし、それから外部の先生方もお越しいただいています。いろいろな、開発型評価とか、それから評価の観点ということで、いろいろな目が必要だというようなことを、今日はずっと話してきたと思うんですけれども、そのメンバーの方々がここにいらっしゃるというふうに思いますので、ぜひお願いいたします。青木先生お願いいたします。ご発言の前に名前とご所属をお願いいたします。

○**青木**　文学部で教員をしております青木と申します。さっきの池田先生の報告の中に出てきたのかな。国際化というようなことを言ったときに、やり方として、例えば学内で、英語で取れる科目を増やして、それで、ある意味では留学生を結果的には増やして、それがグローバル化だというようなのは、どこかちょっと違うんじゃないのというようなお話があって、そのときに、現在、本学がやっている試みで GLAP、Global　Liberal Arts　Program、簡単に言うと、かなり少人数なんですが、学生を採って、1 年間の海外留学を含めて、とにかく 4 年間で卒業させるのですが、その間、本学の中で履修する科目も基本的には全部英語というような、他大でも似たような試みは少し行われつつあるかと思いますが、そういうことをやっています。

　それで私はそのプログラムの開発責任者なので、ここで言うとかたき役みたいなところもちょっとあるのですが、ただ、そういうわけで、一見すると、例えば私が現在関わっている、そちらにいる山口先生も関わっていらっしゃるのですが、そのプログラムは、日本語はむしろグローバル化にとって決定的な重要性を持つものではないかのように見えるのですが、実は、私はそうではないというふうに考えています。GLAP というプログラムをつくっていく中で、あくまで、とりあえずは英語でやっていこうということであるのですが、やっぱり立教大学が持っているものすごく広い教育的な資源というようなものを、基本的には生かして学生を育てる、そういうプログラムをつくろうというふうに思っています。ただ、現時点でやや先進的に、あるいはひょっとすると先端的に学生をグローバルな教育の世界に交流させるために、まずはとにかく英語だけでやるコースをつくろうということでやっているんだけれども、最終的には立教と、それから海外の大学の教育、研究、両方だと思いますが、交流自体をより活発にして進化させていくということのためにやっているんだというふうに思っています。

　そうなってくると、やっぱり絶対に日本語というものの必要性というのは、本

当にどんどん大きくなっていく。一番直接的には、今回実は、先月、山口先生と私、北米の幾つかの大学を訪ねて、GLAP という新しいコースの学生さん、1 年留学させないといけないので、その留学席の確保というんですか、そのために北米の大学をお訪ねして、いろいろとお話しをしてきたのですが、当然のことですが、うちの学生を引き受けてもらうためには、向こうからもいろいろな意味でこちらに来ていただくということがないと、決してこれはうまくいかない。そういうふうになってくると、もちろん表面的、あるいは部分的には、従来に比べると、立教でも英語で取れる科目が増えましたので、学生さんを送っていただいても大丈夫ですよというのは、短期的にはもちろんあるのですが、同時にでも、本当にそれだけでいいのかというふうに考えると、本当に進化させようと思ったら、やっぱり来ていただいた方に、どれだけ立教が持っている豊かな資源、これはやっぱり基本的には日本語の文脈で育まれているもので、それをどれだけ取り入れていただくかということになって、日本語教育の問題は決定的な重要性があると思います。

私どもが交渉させていただいた向こうの大学の関係者の方も、じゃあ立教へ行ったときの日本語の対応というようなことに対して、かなり強い関心をやっぱりお持ちになっていて、その点は非常に大事だなというふうに思います。私としては、ここで GLAP の宣伝をさせていただいて、同時に日本語教育センターのいろいろな取り組みには敵意はないのだということをご理解いただければということで、少しだけお話しさせていただきました。

○**丸山** ありがとうございました。池田先生、ほっぺが膨らんでおりますが、よろしいでしょうか。

○**池田** 青木先生に悪意がないのは百もわかっているのですが、ここからは広報というか、どう外に聞こえ、どう外に見えるかということと関連してなのですが、よくよくお話を聞いて、伺えば、山口先生や青木先生のおっしゃるように、そのGLAPというプログラム自体が日本語教育に敵対するものではないということは理解できるのですが、そのGLAPというものが、立教大学を通して表に出たときに、外の人たちがどういうふうに受けとめるかということです。

そうなると、やはり英語で全てを卒業していくのだというイメージがものすごく表に出ていくんです。外国に対しても、英語で卒業できるんだという情報がインパクトを持って伝わっていく。その背景にある、実は日本語であるとか、日本の社会であるとかというところの部分が伝わらない。なので私は、GLAPのプログラムは、別の私は大嫌いですけど、つまり日本語教育センターではない立場の私は、GLAPに対しては非常に警戒心を抱いていますが、日本語教育センターとしては、そんなに敵対心を抱いているわけではないんです。だけれども、やはり、どう外に出していくかという、その出し方については、大学にはやっぱり物を申したい気持ちはすごくいっぱいあります。どう外に受けとられるかというところについても、やはり機構に入ったので、機構の中から、それは日本語教育センターにとってはよろしくないメッセージの出し方だということは伝えていければなというふうに思います。

○**山口** 今の池田先生のご指摘の点は十分注意しないといけないことだと思います。ただ、青木先生もおっしゃったように敵対するものではないし、逆に今考えているプログラムというのは、立教大学の教育のあり方そのものを変えないといけない部分は変えていこうということを考えて今、議論をしているところであります。ですから、池田先生のご指摘というのは非常に重要で、実は日本にある大学なんだけど、英語だけで出られる。そのときに日本というのを全然大切にしていないのではないかというふうに思われないというところが多分一番大切だと思います。ですから立教大学は、世界に対して貢献をする大学ですが、日本にある大学で、その存在感というのをきちんとした生かしたうえでプログラムというのを展開しないと意味がないと思いますので、その点はきちんと、何というんですか、大学全体で共有しながら、日本にある大学なんだということをきちんとアピ

ールする。それでないと、世界から学生を呼ぶということはできないと思いますので、その点は十分、気をつけてやっていきたいと思います。

○**丸山**　ありがとうございました。

○**西原**　ユネスコがいろいろな宣言を出すんですけれども、言語教育について、ユネスコは既に宣言 30 というのを出しているんです。それはこれからの世界の多様性、そして持続可能な世界ということを考えると、複数の言語を子どもたちが学習して育つことは、もう不可避だ、絶対必要だ。そして多くの国の課題として、それについての会議があったんですけれども、それぞれの母語は絶対大丈夫。英語は世界語なので、これは当たり前。だから母語と英語ができる世界の中で、じゃあもう一の言語、あるいはもう二つの言語を、どうやってハンドルできるかということで、多様性の中で自分自身を磨き上げていく能力、これからの世界にとって非常に必要なそういう能力が育つということが言われていました。

　ですから、日本人にとっては日本語と英語は当たり前、プラスアルファは何なのということが問われる世界ということになってきているのではないかと、プログラム評価とは関係なく思いました。

○**丸山**　ありがとうございました。田丸先生、お願いいたします。

○**田丸**　もう 1 つ、プログラム評価と関係がないんですが、今、西原先生がおっしゃったことに関連して一言。私が教えておりました国際大学というのは全て英語で授業をしておりますので、日本語は要らない。少なくとも大学の中では要らなかったわけです。ところが来た留学生が日本語を勉強したいと言うので、大学は嫌々ながら日本語プログラムをつくりました。大来佐武郎先生が学長で、やらなくていいと言っているのに何でやりたがるんだ、ほんとにとおっしゃっていた。

　でも実際、今、西原先生がおっしゃったその視点というのは、まさに私が思う、英語で授業をするから国際化なんじゃなくて、そういうふうな、つまり、特に自分の生まれ育った言語と全く違う言語を学ぶ忍耐力と寛容さ、我慢すること。これがつくかつかないかというのは、非常に学生の将来にとって大きなことなんですね。そしてもう 1 つは、日本に留学したけれども、日本語は勉強しなくていいと言われたから私はしませんでしたという学生は、やはり卒業して、将来その人がキャリアに就いたときに、あんまり信頼されないということ、特に自分の国に帰った後で、そういうことが言われるということがあります。ですから私は、日本語教育は、どこまでとは言えませんが、日本いる限り大切なエレメントだと思います。

○**丸山**　ありがとうございました。

　ではちょっと、プログラム評価の方にぐっと焦点を戻しまして、皆様からまたご意見、質問などいただければと思います。お願いいたします。田中先生いかがでしょう。

○**田中**　ICU の田中と申します。プログラム評価ということで、1 つ気になっていることがあるので。池田先生の発表で、今現在、どのように私たちが評価をしているかということで、「内向き」という言葉と「画一的」という言葉が出されました。「内向き」は非常にわかるのですが、「画一的」という言葉が妥当じゃないような、私の感覚ではそれは違うかなと思いました。ただ、その後で、要するに私は海外が長いものですから、日本語というものと他の外国語というものが同じ、日本語も外国語ですから、同じ軸にある。でも、ここにおいては、その後で、現地語であって、生活言語としての外国語であるということで確かに違う。ただ、評価項目が画一的とか横並びであることは、やっぱり言葉が違うんじゃないかなと思いました。

　画一的であるということを反対に言えば、基準がある、あるいはスタンダードがあるというふうに考えれば、それはそうあるべき姿かもしれないし、あるいは透明性とか可視化ということであれが、やはりそっちは望ましい。だから画一的というものが、同じであるということは別に悪いことじゃない気もするんですね。でも内向きであって、すごく狭い見方しかできない。

そしてもう 1 つが、何となく物まね的。周りがやっているから同じことをやろう。そういうところであれば、それは是正していかなくちゃいけないものである。ですから先生がおっしゃる画一的という言葉を選んだお気持ちを説明していただけるといいかなと思います。

○**池田**　私が画一的という言葉を使ったのは、確かに、例えば日本国内の中にある日本語教育組織で、同じような項目で評価をしていくというのは、ある意味基準になっていくし、先生がおっしゃるようにスタンダードになっていく。だけれども、私が伝えたかったのは、いわゆる大学の中での評価、つまりいろいろな部局がある中で、全ての部局が同じ評価項目を使って評価をしていく。それは大学の中のスタンダードにはなるかもしれないけれども、日本語教育という立場で考えたときに、そのスタンダードで評価をされることについてよしとしない。そこについてはきちんと訴えていかないといけない。

それを訴えるためには、日本語教育センターというのがどういう使命を持ち、どういう機能を持ち、何を期待されているかということから、日本語教育センターの新たな基準をつくっていく。それがスタンダードになっていく。そうあるべきだという意味で申し上げました。

○**丸山**　ありがとうございました。私も池田さんのコメントにちょっと加えさせていただきたいんですけれども、私が経験してきた自己点検であるとか外部評価というのをまとめていくときというのは、こういう点についてまとめてくださいというようなことがあって、指定された項目を一生懸命埋めていくというか、自分なりに説明していくということだったと思います。その結果できたものというのは、非常にカタログ的なデータで、私自身は自分の前にいた組織で行った自己評価、それから外部点検ですね。その外部評価のデータを一生懸命書きましたけれども、冊子になったときに見ない、決してそれを振り返ることはないし、徒労感でいっぱいだった。

その項目の中から指定された項目以外のところで、自分たちはこういうオリジナルのことをやっているのにというところは、備考の欄にしか入っていかなくて、本当はそこをまさに訴えて、効果的に見せたいというふうに思うし、それからそこに、何というんでしょう、そこいに現場にいる人たちの工夫とか、クリエーティビティーというのがあるのにと思った思いがあるものですから、画一的というのは、池田さんはそういう意味で使ったのかなというふうに思っています。

すみません、私が話しまして。じゃあ続けて、大学院生の加藤君、お願いします。TA もやっていますね。授業の教室内も知っています。

○**加藤** 立教大学大学院の異文化コミュニケーション研究科の今、M1 をやっています加藤といいます。本日は貴重なお話をありがとうございました。僕は専門家でもないですし、今、専攻としては英語教育の中で、将来的には英語の教員としてやりたいと思っているので、ちょっと専門は違うんですけれども、学生の立場としてちょっと思ったことがあったので、言わせていただきたいと思います。

今、TA、Teaching Assistant という形で日本語教育に携わらせていただいていて、また立教日本語教室という、地域の日本語教育を支えるということで、豊島区に住んでいる方で日本語教育を必要としている方というのに、ボランティアという形で日本語教育というか、教育ではないんですけれども、日本語を一緒に学んでいくというような活動をやっているんですけれども、そういうのを通して考えると、大学として、留学生の方であったりとかにやってあげられることというので、今、お話があったことがあると思うんですけれども、僕はもう 1 つ、留学生と今いる日本人の学生との関連が少ないなとちょっと思っています。

というのも、ほかの大学を見たときに、例えば早稲田であったりとかだと、学生寮として、留学生と日本人が一緒に生きる環境があるとかが挙げられたりすると思うんですけれども、そういったような、日本人と留学生がもう少し関わりやすい環境というのがあると、あ、立教もいいなというふうに選んでもらえるのかなとちょっと思っていました。というのも、立教日本語教室に来る大学生とか若

い方がいるんですけれども、聞いてみると、日本語を勉強したいという理由よりも、日本人と話す機会が少ないから来たいとか、今一応、立教大学の留学生というのは、立教日本語教室には一応、正規の授業が用意されているのでごめんなさいと言ったような制度をとっているんですけれども、でも実際には留学生が正規の学生と交流する機会がないから、実際の場で日本語を使う機会が欲しいであったり、交流する機会が欲しいというようなことを言われているのを聞いてみると、プログラムとしてどういう教育を提供するかであったり、どういう環境を整えてあげるのかというのもすごく大事だと思うんです。

それと同時に教育外のことも、田丸先生のレポートの一番最後のところに、教室外での活動、支援組織等という項目があったんですけれども、もう少しくいうところに目を向けると、留学生が大学を選ぶときの基準として、もう少しよくなるのかなと。環境が改善されるのかなというふうには思いました。以上です。

○**丸山**　ありがとうございました。

○**西原**　私、今のこと、とても大切なポイントだと思うのですけれども、大学評価機構という、評価をするところの機構があって、その機構が、この研究科、この学科ごとに、評価すべき項目を別々につくっているんですね。そして国際文化とか、異文化というところについて、評価に加わったこともあるんですけれども、そこの 8 つの大きな分類と、それについている小さな、結構、50 ぐらいの分類の評価のポイントの中に、今おっしゃったことが入っていると思います。これはプログラム評価の一種だと思うんです。ですから画一的な評価というのにまさに当てはまるような機構の評価ですけれども、よく見てみると、結構リーズナブルな、目配りの利いたポイントを出しているなと思って、今のコメントを聞いておりました。

○**丸山**　ありがとうございました。山口先生、お願いします。

○**山口**　今ご指摘いただいた点のところで、実は立教大学は国際交流寮があったり、各留学生に対して、実はアドバイザーという形で日本人学生を 2 から 3 名つけていてというようなことがあります。ただ、ご指摘いただいたということは、多分そこの実態についてのところが十分でなかったり、もしくは今関わられている留学生のところでは、その交流が少ないという実態があるから、こういう意見が出たのではないかと思います。機構であるとか、国際センターは、昨年、グローバルラウンジをつくって、いろいろなイベントやるとか、留学生と一緒にいろいろな活動をするということについては、非常に重視しています。

立教大学全体が正課プラス正課外ということで、若い人たちを育てる。立教大学は例えば正課外の活動のところで、例えば体育会所属率もかなり高い。そういう状況で教育をやってきたというのもありますので、留学生についても、授業を一緒に受けるというだけではなくて、いろいろなそれ以外のところ、さっきあった、青木先生がお話しになったGLAPのところでは、寮生活ということも含めて1つのプログラムとして進めていこうとしていますので、我々としては、いろいろとやっているというところが一方であるんですが、今ご指摘いただいたというところは、多分情報提供として足らないところがあるからかと思います。その辺はぜひ改善していきたいと思います。

○**西原**　こういう仕事をやっていますと、日本人に対して物を言いたくなるんです。本当にそうなんです。それはどういうことかというと、大学コミュニティーの場合に、一人一人の学生が隣にたまたま座った留学生と、どういうふうに関わっていくかという問題であろうと思うんですね。大学がどういう仕組みをつくるかということ自体よりも、学生たちが、さっき言った多様性ということを、本当に心から立教のいいところと思って大学に来ているのかということと関わっていくというふうに強く思うので、それを何というか、立教の中全体で、それこそ1年生に対するオリエンテーションのところでも、世界中の多様性ということを、我々が育てて、我々がやっていくんだという自覚があるといいなと思うんですけれども、ICUなんかはどうでしょうか。

○**小澤**　ICUもまさに同じような問題なんですが、すみません、ちょっとご質問から話題をずらしますが、結局いろいろなお話聞いていても、やっているつもり、やっていますと、やられている感がすごく違う。先ほどから池田先生おっしゃっているように、伝え方と、あとやっている側が本当にそれが伝わっているかのモニターができているかという問題だと思うんですね。いろいろな取り組みをしているのであれば、本当に参加型で、学生数名をフォーカスグループでもいいと思うんですが、インタビューしてみて、それを経年的に見て、去年よりもことしのほうが学生の印象が上がっているとか、上がっていないとか、何かそういうデータでもって、やっぱりちゃんとできているねという場所が必要かなと思います。こういうことを調べたらいいというのは、結構どこでも聞くような話だと私自身は思うんですね。

きょうフロアで聞いたことも、世間話の中ではすごく出ている。でも大学が報

告する報告書の中で、そこが評価指標として出てくることがあまりないので、結局は評価をどの観点でやるかということについて、一部の部局、例えば IR などが一部の部局で決めて、お達しを出してやって、結果こうですよとプリントして出すだけではなくて、いろいろな部局で、さっきでも、ちらっと若い人たちと話しているというようなお話もあったので、そういうところで、広い観点で、この指標で行きましょうというゴーサインを出して、学生も教職員も参加型でやってみて、それを公表するときに、また 1 つのインタラクションができるので、きょうなんかの場所もすごくいいと思うんですね。記録に残してそれが広まっていくということで、いろいろな形でデータを活用するといいのかなと思いました。

○**丸山**　ありがとうございました。予定の時間を過ぎましたので、そろそろまとめたいというふうに思います。2011 年に日本語教育センターができてから、新しい組織で、そして大きくはない、小さな組織で動かしていくときに、でもやっぱりプログラムはよくしていきたい。そのために、プログラム評価というのはやっていかなきゃいけない。だけれども、自分自身の経験から、やっぱりやったらそれが自分でやってよかったと思える、それから自分たちに返ってくる、徒労感がなくて、前に進む、元気になるような評価というのができたらいいなという思いから、このプログラム評価のプロジェクトが出発したと思います。

　その中で、やはり参加型というのをとってやってみたんだけれども、趣旨説明でお話し申し上げたような、本当に流動的な、変化に富む状況の中で、自分たちがどういうふうに生きていくか、どういうふうにプログラムをいい形に持っていくかということが一番大きなところにあったと思います。そのときに、昨年のシンポジウムで、開発型評価の視点を頂いて、ちょっとやってみて、それから、今年度は、日本語教育センターが国際化推進機構の下部組織として、国際化を推進する役割の一部を担いながら前に進んでいくというような役割を持ったところで、年度の初めに山口先生から、「味方になるから大丈夫だから」と、エレベーターの前で言っていただいて、そこに勇気をいただいて、そして池田先生には、「大丈夫、言っちゃいな」みたいなことを言われながら、恐る恐る言ってみると、山口先生がまた答えてくださるという中で、きょうのこの会というのが成立してきたなというふうに思います。

　田丸先生には、今年度初めのころ、早々に、本当に飛び込みでメールでお願いして、それから直接お会いして、ぜひというふうにお願いして、きょうのご講演

をお引き受けいただきました。今日は、お話を伺い、やっぱりそうだった、やっぱりそうかという思いがするお話を承りました。

西原先生からは、第 1 回目のシンポジウムから続いてずっと応援していただいきましたが、今日も広い観点から、私たちの行くべき方向を見せていただいたように思います。

また小澤先生は、ずっと継続的に外部からの評価者として来ていただいているんですけれども、自分たちの状況が変わっているということを意識するのは、外部の評価者の方が来て、自分の状況を話したときに、えっ、それ、前はこういうロジックモデルだったよね。それで進めていこうかというふうになったときに、いや、ちょっと違う要素が出てきたということを説明する。その積み重ねの中で、このやり方というのは本当にいいのかどうかというような不安につながっていった。それが第 3 回のシンポジウムにつながっていったなというふうに思っております。そういう意味で、私たちが外部の評価者を迎えたというのは非常に大きな意味があるというふうに今も思っております。

そして長尾先生には昨年度開発型評価の視点を示していただいて、そして今日は、コメントを頂戴いたしました。このまま進んでも大丈夫じゃないかというふうに背中を押していただいて、元気が出た会でございました。山口先生、池田先生、会場の皆様もありがとうございました。おかげさまで、本日も丁々発止で、本音で議論ができました。どうもありがとうございました。

○**栗田**　先生方、ありがとうございました。